

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要

論文題目

「個」からはじまる関係性を目指して

－「にほんご わせだの森」における「ことば」の捉え直しから見えたこと－

大森 優

2010年3月

第1章 序論

本研究は、日本語教室における「日本語」の位置づけを捉え直し、それが参加者の関係性の構築や変容にどのように関わるのかを、「にほんご わせだの森」を対象とした実践研究で明らかにしようとするものである。

地域日本語教育という文脈では、日本人ボランティアも外国人学習者も同じ住民として対等であるべきだという。日本人と外国人の間には「教える側と教えられる側」という固定化した「力関係」(田中 1996)があることを指摘されて以降、そうした権力関係を批判的に再検討、検証する動きが活発となっている(森本 2001、Ohri 2005 他)。

しかし、「教える－教えられる」という型にあてはめて関係性を判断し、批判するだけでは、なぜそうした構図が生まれ、力関係が再生産されてしまうのかという根本の解決にはならない。真に関係性を捉え直すためには、立場上の関係や表面に見えるやりとりだけを切り取るのではなく、その根本にあるものとして両者の間にある「日本語」がどのようなものであるかを合わせて考えようとする視点が必要である。

「教える－教えられる」関係に陥ることへの反省が意識としては浸透してきた今、その次へ進む段階として、「なぜ」そうした二項対立的な構図が生まれているのか、どのようにすれば二項対立的な関係を超越することができるのか、実践の中からその根本を問い直す必要があると考える。そのために必要な手順として、筆者はまず、「何を」教えているのかというところに焦点を当てて見直すこととした。「何を」の部分に何がくるかによって、必然と関係性の捉え方も変わると考えるからである。

以上から本研究の目的を次のように設定した。

- 1) 日本語教室における「日本語」の位置づけの捉え直しを図る。
- 2) そしてそれが関係性の構築や変容にどのように関わっていくのかを明らかにする。

本研究では実践研究という立場から、「にほんご わせだの森」に集まる参加者のやりとりや語りを一つ一つ描くことによって、上記の問いを明らかにすることを試みる。そこから、参加者間で様々に築かれる関係を二項対立的な構図でのみ捉えるのではなく、活動の根本にある「何を」教える、学ぶ場であるのかというところに意識的になることによって、関係性を捉えていくことの重要性を示す。それは延いては、二項対立的な関係を根本から解体することにつながると考えるからである。

第2章 先行研究と本研究の立場

生活や生きることに根ざした「日本語」を扱うからこそ、「地域日本語教育」は「日本語」ということばの意味や、ことばを介しておこなわれるコミュニケーション、そこで築かれる関係性についてなど様々な問題を投げかける。そしてそれらは、日本語教育の根本を問い直し、日本語教育は「日本語の教育」だけを目指すものではなく、「日本語を通して、人と人が関わりあいながら学びを広げていく教育」を行うものであるというパラダイムの転換を促したといえる。このように、地域日本語教育は人が「ことば」を学ぶ原点として、その活動の中から日本語教育に対して、重要な課題を提起してきた。

しかし、研究の中で示される理念が地域日本語教育の現場にいかされないという現状がある。たとえば岡崎（2007）の「共生日本語教育」や西口（2008 他）など「日本語」の捉え直しを図る重要な指摘をしながらも、それを実践の中でどう具現化できるかという記述に欠けていることで、実践の場につながらないのである。

また、ボランティアと学習者の関係性を批判的に再考しようとする研究として、森本（2001）や Ohri（2005）は両者の間に権力関係がみられると指摘しているが、それらも結局は、ボランティアや実習生といった、実際にその教室を作る実践者不在の分析であると言わざるを得ない。それでは、本当にそうした力関係が参加者間に生じているのか、生じているとすれば「なぜ」なのかというところまで検証し、実際に現場の関係性を見直していこうとすることができない。実践者が何を考えてその場を作っているのか、「何」を教えているのか、ということがその教室の有り様を規定し、そこに参加する者の意識ややりとり、延いては関係性に影響を与えると筆者は考える。

こうした課題を踏まえて、「日本語」の位置づけを捉え直すことが、関係性の構築や変容にどのように関わるのか、ということを実践研究の中で明らかにすること、そしてそこで得られた知見を地域日本語教育のみならず日本語教育にかかわるものとして捉えることを筆者の立場として示した。

第3章 研究方法

本研究は早稲田大学大学院日本語教育研究科の実践研究（1）という授業の一環として設計される「にほんご わせだの森」（以下わせだの森）をフィールドとしている。わせだの森は、実践研究（1）の受講生である院生が教室の設計者となって教室のコンセプトの決定から、参加者募集、活動設計、教室運営のすべてを行う。本研究においては、筆者が

設計者としてかかわった 2008 年秋学期（08 秋）と 2009 年春学期（09 春）を分析の対象とする。

本研究では主に 2 種類のデータを分析対象とした。①筆者が毎回の活動で見聞きし感じたものを記録したフィールドノーツ、②08 秋・09 春の終了後におこなったインタビューである。インタビューの協力者は、外国人参加者 2 名、日本人参加者 2 名の合計 4 名である。参加者の中でも、活動に継続的（1 年以上）に参加している方に調査協力をお願いした。インタビューは各インタビューイーに 1 時間から 2 時間程度行った。やりとりは日本語で行い、インタビューの様子は承諾を得た後 IC レコーダーに録音し、文字化した。

本研究では、わせだの森という教室の中でみられるやりとりや参加者の語りから、教室の中軸にある「日本語」の捉え直しを図ることが、参加者間の関係性の構築や変容にどのように関わっていくのかを明らかにすることを目的としている。そのためにデータを分析する観点を以下のように設定した。

- ①日本人参加者と外国人参加者の間に「境界線」はあるのか
- ②その「境界線」はどのように変容するのか

①については、参加者それぞれが他の参加者と比べて、どのような役割やアイデンティティを自己に見出しているのか、そこに「日本人性」や「外国人性」があるのかを分析した。②については、①を受けて仮に日本人参加者と外国人参加者の間に「境界線」があるとして、しかしそれは固定的なものなのか、変容するとすればどのように変容するのかを分析した。

第 4 章 分析と考察

わせだの森の参加者の語りや活動での様子、そして筆者自身の設計者としての意識や視点を振り返り分析してみると、あらゆる場面で日本人参加者、外国人参加者双方の意識の中に「日本人－外国人」、「ボランティア－学習者」や「先生－学生」というくくりが確かに存在していたことが明らかになった。ただ、そうした意識や行動には、迷い、矛盾もあり、それが即二項対立的な関係になっているとは言えず、時間の経過や他者の様々な側面を知る中で変わっていく意識もあるということも示された。つまり、わせだの森ではそれが二項対立的なものとして常態化していなかったのである。

それは、わせだの森では日本人参加者も外国人参加者もそのくくりを超えて「個」とし

て他者を捉えることができたからである。「日本人－外国人」や「ボランティア－学習者」としてはじまったとしても、やりとりを通してそこに一步踏み込み、他者を「個」と見るようになることで、当事者同士が「個」と「個」として新たな関係を築いていくことができるということが明らかになった。

わせだの森では、「日本語」を形式としての日本語ではなく「ことば」として捉え、その「ことば」を、自分を伝え、他者を知るためのものとして位置づけていた。そうすることによって、日本人、外国人にかかわらず、一人一人がその「ことば」を学ぶ存在となり、自分に向き合うことをしていた。「ことば」を介して互いを伝え合い、新しい一面を知っていく過程に、それぞれの参加者が自分で相手との間にある「境界線」を修正する余地が生まれていたといえる。

第5章 結論

本研究では、「ことば」の意味やその「ことば」が参加者間の関係性の構築や変容にどう関わっているのかを明らかにすることを目的とし、「にほんご わせだの森」という一つの教室の中で起きている出来事ややりとり、参加者の語りを分析、考察した。

そこで明らかになったことは以下の2点である。

- ①「ことば」とは、他者を知り自分を伝えるためのものであり、それは言語の枠を超えて人が生きる上で本質的に求めるものである。
- ②そうした本質的な意味として「ことば」を捉え、教室に位置付けることによって、参加者は「顔」を持った「個」として浮かび上がり、表面に見える二項対立的な関係を越えた関係を個々が構築、更新していくことができる。

一つの教室や、そこでの活動を設計する上でまず必要なことは、設計者が「ことば」をどのように捉え、「ことば」は何のためのものなのかを考えることである。そこから、ではその「ことば」をこの場ではどう扱うか、どのようにしてその「ことば」の学びを起すことができるか実践活動を考えていくのである。

わせだの森 08 秋、09 春の実践、そして本研究を通して筆者が言えることは、わせだの森における「日本語」は、自分を伝えるため、相手を知るため、その「人」を伝えるための「ことば」として位置づけられていたということである。そうすることで、日本人参加者、外国人参加者双方に「ことば」の学びが起きていたと考える。

本研究で明らかになったことをまとめると、次のようなことが言える。

日本人参加者、外国人参加者双方がそれぞれ相手との関係を規定しあい「境界線」を引くということは確かにあるが、自分や他者の様々な側面に気がつくことで、そうした「境界線」は変容しうる。したがって、外側からある種人為的に、表面に見えるくくりや「境界線」を取り払おうとするのではなく、それを超えて何ができるのかを考えることが二項対立的な関係を常態化させないことにつながる。重要なことは、それぞれの参加者が他者との関係を自分で更新していく余地を活動の中に生み出すことである。

その一つの方法が、参加者が教室の中でそれぞれ「個」となれることである。日本語そのものではなく、日本語によって語られるその人自身に焦点をあてることで、一人一人がエピソードを持った「個」として浮かび上がる。そのためには、日本語を形式としての言語ではなく、自分の考えや思いを伝えることのできる「ことば」として捉えて教室の中に位置づけ、それを参加者と共有することが必要である。

このように、設計者が参加者と共に日本語とは何かという根本を問い直すことによって、活動の在り方や関係性の捉え方も変わることを示し、二項対立的な形でのみ関係性を捉えようとするものの意味のなさを指摘した。

参考文献

- Ohri, Richa (2005) 「『共生』を目指す地域の相互学習型活動の批判的再検討—母語話者の「日本人は」のディスコースから—」『日本語教育』126、pp.134-143
- 岡崎眸 (2007) 「第12章 共生日本語教育とはどんな日本語教育か」野々口ちとせ・岩田夏穂・張瑜珊・半原芳子編、岡崎眸監修『共生日本語教育学—多言語多文化共生社会のために—』雄松堂出版、pp.273-318
- 田中望 (1996) 「地域における日本語教育」鎌田修・山内博之編『日本語教育・異文化間コミュニケーション—教室・ホームステイ・地域を結ぶもの—』(財)北海道国際交流センター、pp.23-40
- 西口光一 (2008) 「市民による日本語習得支援を考える」『日本語教育』138、pp.24-32
- 森本郁代 (2001) 「地域日本語教育の批判的再検討—ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」野呂香代子・山下仁編著『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』三元社、pp.215-247